

## 山口博士の學問

高橋泰藏

一つには、私自身を批判し反省する手懸りとするためである。

この小論で述べようとしていることは、山口茂研究というほどの周到な準備と大規模な構想によるものではないし、また山口教授著作解説といったような、個々の著述、論文の内容に互つての精緻なものでもない。いわゆる傳記風に博士の頌徳表の如きものを書くことが目的でもない。こゝで試みようとしていることは、わたくしなりに解釋した山口博士の學問の性格ないし方法である。それは或は感想に類するものとなるであろうが、比較的長い期間に互つて絶えず博士の指導を受け、影響を蒙つたわたくしとして、この機會に博士の學問の方法、性格について、覚え書き風に書き記したいと考える。それは

副次的にはあるが、この小論を企てた今一つの理由は、博士の著作や講義が甚だ理解しにくいという批判のしばしばきかれることと関連する。たしかに博士の著作、講義については、一回程度の卒讀、聽講では理解し難いもののあることは、わたくしも認めるに吝かでないし、經驗したところである。その原因の一部は、或は博士の文章、表現の晦澁に歸せられるべきものがあるであろうし、また述べられるところが學說の解釋や博士自身の考え方に重點がおかれて、讀者や聽講者の古典についての素養が前提せられていて、特にいわゆる紹介が省かれるということもその原因の一部として擧げられうるで

あるう。しかしそれらが博士の學問の難解さの原因の一部をなすにしても、その原因の全部ではなく、いんやその根本をなすものでないことはいうまでもない。しかしこれらのことから、博士の學問が理解しにくい結果となつてゐることは、著述者として、また講義者として決してよいことでないことはいうまでもないが、その反面博士の學問の理解せられにくい理由が、これらのことに歸せられることは正當ではないし、さらにこのために正當な評價を受けえないとすれば、それは博士自身にとつてのみでなく、學問そのものために惜まれねばならぬといわなくてはならぬであらう。この小論で、わたくしなりの理解にすぎないことは十分承知しながら、敢えて「山口博士の學問」について述べようとする理由は、博士の學問の根本が、その方法、性格にあり、しかもそれが表面的な理由から正當な理解が妨げられ、評價を不當にしていると考へるからに外ならない。

## 二

博士の學問が一般に理解しにくいとせられる根本の理

由は、現在盛行の經濟學と、その方法、性格を異にすることにあると思われる。博士の學問が經濟學界からいわば孤立した觀のあるのもこの故に外ならない。

端的にいえば、博士が常に求めてやまないものはシステムということであつた。一つのシステムをもつものとしての經濟世界像を描くということであつた。それは別の言葉でいえば、經濟世界像を一つの原理によつて貫かれたものとして描くということに外ならない。このようなシステムへの強烈な要求が、個々の理説、法則の精密な解明というよりは、それらが全體としてのシステムの中に如何に位置づけられるかに、より多くの關心が向けられる結果となり、經濟學のシステムとしての性格を重視する態度となる。このために、個々の理説、問題についての説明が、それが個々の理説、問題についての凡そ取り上げらるべき説明を比較、検討することによつて、理論毎に、或は問題毎に理解し易い明快な説明を與へようには、博士の場合には明快ではなく、理解しにくいという結果になつてゐると思われる。凡そ學問に志すものとしてシステムを重視することは考へられぬことで

はあるが、個々の理論、概念を、その基礎となり背景となつてゐるシステムから切り離して比較したり、結びつけたりすることは、博士にとっては耐えられぬところであつた。この博士の態度は、平明ないい方をすれば、「自ら納得のゆくことを求める」といひうるであらう。わたくしはかつて、書物の形をとつた博士の最初の著作ともいへば『流通經濟の貨幣的機構』について潜越にも書評を試みた際に、その讀後感の最も強い印象を上の方言葉で表わしたのであつたが、博士のその後の著作を通じてこの感想は常に易わらないものである。

上にいつたシステムを求め重視するということは、しかし博士の場合には單に論理的整合を求めるといふことにとどまらない。理論家としては常に論理的整合を求めたことも否定しえないが、しかし經濟學者としては、より廣い意味でのシステムを重視したからである。この意味におけるシステムは、本來特定の、いわば個性をもつた學問體系に外ならないのであつて、このことが上に述べたように背景をなしてゐるシステムとは切り離して個々の理論、法則を取扱へないといふ博士の態度の一面

山口博士の學問

をなしたわけであるが、しかし博士の場合には、この意味における特定の個性的なシステムは、單なる理論的世界の外に、さらに歴史(事情)と政策とを併せ含むものとして考えられたものであつた。理論と歴史と政策とを分けるといふことは、教壇的分業の必要ないし著述上の便宜としてしばしば行われることであるが、重要なことは反對に理論と歴史と政策とが結合せられた一體として理解せられることではなくてはならない。博士が常にシステムといふことを強調せられるのは、このような意味での理論と歴史と政策とを一體として見ることの重要性を考へるからである。それが博士の學問の仕方であつたし、英、佛の古典經濟學に執著せられるのも、この故に外ならぬと思われる。或はそのためにいわゆる理論という觀點からは形式的な純粹さを缺くかの如くに見え、博士の學問を理解しにくいものにした一原因をなしてゐると想像せられる。しかし理論と歴史と政策とを分けて見ることは容易ではあつても、これを一體として見ることは容易な業ではなく、博士はこの容易でないことを心懸け、果した數勤い學者の一人といわなくてはならぬであ

ろう。もし博士の學問の眞骨頂を一言でいい表わすならば、まさにこの點にあるといふべきであろう。

さきに博士の學問的態度について、「自ら納得を求めらる」という言葉を使ったのであったが、このことは博士がしばしば孔子の「學んで思わざれば則ち罔し」という言葉を引いて、自身の學問的態度を語ると同時に、われわれへの戒めとせられたことにも窺うことが出来る。ここで博士が言わんとせられていたことは、書物を讀んでメモをとり、はっきり自分のものにならぬのに右から左へ受賣りしたり、システムや背景の異なるものをそのまま比較したり、つぎ合わせることは、眞の學問たりうる所以ではない、自分のものとして齟齬し、自分の座標の上での位置づけをはっきりさせることが肝要であるといふことであつたらしく、この意味で「納得がゆく」といふことが「思う」ということに外ならなかつた。しかしこれは主として理論に關していわれたことであつて、博士はそれに次いでまたしばしば「思うて學ばざれば則ち殆し」といふことをいわれた。ここで孔子のいわゆる「學ぶ」といふことは、單に書物を讀み、形式主義的に

公式を會得するということではなしに、事實を知り、事實に照らして確かめるということである。告白すれば、この後段、特にその「學ぶ」といふことの意味を知り、判かつたように思われたのは、此の頃吉川幸次郎氏の説明を讀んでのことであるが、これを博士について見れば歴史（事情）の知識、研究を重要視せられた態度が、まさにそれであると思ひ當る。（そう思つて、今年の卒業記念アルバムに學生諸君に贈る言葉としてこの二句を書いたのであつたが、調べて見ると、それは博士が既に數年前のアルバムに書かれ、さらに最近の博士の編に成る『金融論』（經濟學演習講座）の序に引用せられてゐるところであつた。）

### 三

それでは一體、博士のこのような學問への態度はどこから來たか、またどのようにして培われたのであろうか。要約的にいえば、博士の學問——それは單に經濟學という視野に限られないより廣い意味での學問ないし世界觀という意味での——の背景をなしたものは佛蘭西及

び英吉利の古典經濟學、特にケネー、セイとアダム・スミスのそれであつたようである。そしてそれは博士の學問的基礎を作つたものであつたと同時に、終始博士の學問的背景として離れないものである。人は或は博士がこのように英佛古典經濟學に沈潜し、それから離れないことに、博士の學問の古めかしさを感じるかも知れないし、いわゆる近代經濟學の追隨者達から理解しにくいとせられる理由が、そこにあるかも知れない。しかし恐らく博士をしていわしめれば、そこに問題があるのであつて、システムを求めようとする博士の立場からは、この學問的背景を離れることは出来ないと考えられたのであつた。それは一種の信仰に近いものとさえいふるのであるが、實はこれらの古典經濟學が學問として成立している基礎には基督教的的世界觀が背景となつており、それなくしては生きた人間の世界は理解せられないと考えられたからである。學問という形でいろいろな分業が行われ、それぞれに應じた方法——抽象が行われる必要はあるにしても、それらは要するに、人間社會に關する限り、このような方法で、そのいろいろな側面を分業して

理解しようとするにとどまるものであつて、全體として歸一する中心なくしては、到底果しえないものである。信仰的教理(ドグマ)に代わつて學問が登場し、學問の中に新しい權威と安心を求めようとしたところに近世の出發があつたとはいへ、なお全體としての秩序、原理の存在への信頼なくしては學問は成立しえないし、人間は學問への信頼をもちえないであらう。いわんや經濟學という、全體世界の一側面を取扱う學問についても、博士のいわゆるシステムを想定し、システムを求めることなしには、博士は自らの學問を考ええなかつたと思われ。博士がシステムというとき、理論と歴史と政策とが一體をなすものとして考えられたのはこの故に外ならなかつたし、そこにはディメンションを變えて見れば、信ずる glauben ことと、理解する verstehen ことと、知る wissen ことが一體をなすべきであると考えられているといつてよいであらう。

このような考方——博士に似つかわしくいえば境地——に至つたプロセスとして、一つには博士が少青年時代(曉星中學時代、高商時代)を通じてカトリックの神父

とともに暮したということが見逃せないであろうし、また一つにはその後の助手時代に三浦新七博士の下でアダム・スミスを習ったことも大きな影響をもったと思われる。殊にこの後者については、博士の直接の師たる佐野善作博士自身がすんで「三浦につけ」という助言を與えられたことは甚だ興味あることといわなくてはならぬが、三浦博士の下で博士がえたものは、單にスミスを讀み、logical consequence を求めるといふ學問的態度のみでなく、歴史への關心、歴史理解ということの重要性と、ということであつたと思われる。筆者自身の直接に知り限りでは、博士が留學から歸つた直後に持たれた「景氣論」の講義は、半ばは古典派の恐慌理論であつたが、半ばは十九世紀の恐慌、景氣變動事情であつた。後になつて博士自身の語られたところでは、佛蘭西留學中の仕事は歴史の講義を聴くことであつたということである。これらのことは、理論と歴史(事情)と政策とを一體として考へるといふ博士の學問の成立を理解する上に重要な手懸りをなすものといわなくてはならぬであらう。

博士の學問の出發點に影響を與え、それを築く基礎を

なしたものは上に述べた如くであるが、博士のこのような學問的態度、傾向は、留學から歸えられた後、一層深められたのであつた。その最大の影響が三浦博士によるものであることはいうまでもないが、さらに當時、博士と同時代に新進の學者として出發した同僚諸教授との學問上の交流、特に杉村、村松、上原諸教授とのそれが擧げられねばならない。杉村博士は左右田門下にあつても人も知る最も鋭い理論家或は論理主義者であつたし、村松、上原兩教授は三浦門下の、それぞれに型を異にする優れた歴史家であつた。これらの、それぞれにいわば極度に對蹠的な專攻、方法の人々は、集れば必ず議論となり、議論は必ず白熱し、しばしば激論に及んだようである。そういうとき、博士は杉村博士の論理主義に對しては事情を以て相對し、村松、上原兩教授の歴史主義に對しては理論を以て抵抗し、これらの交流を通して、一面惱まされながらも、大いに得られるところがあり、システムへの要求という自分の態度への確信をいよいよ深められたようである。書物の形をとつた博士の最初の著作は『流通經濟の貨幣的機構』(昭和十四年)であつた

が、その大部分は現在の「年報」の前身をなした「商學研究」及び「經濟學研究」に發表せられたものであり、それらは何れも博士のシステムの原型たる英吉利古典派經濟學と佛蘭西經濟學への深い理解と沈潛を示したものであり、博士のシステムの形成過程と、博士の腦裡に描かれたシステムを示すものであった。本書の最後の部分ではケインズの『貨幣論』が取扱われているが、それは以上のようにして形成せられた博士のシステムの中に溶かし込まれた形になっている。博士の第二の著作たる『價格水準の基本理論』（昭和十八年）は、前著で到達せられたシステムを積極的に述べるとともに、いわば動態理論ともいべき價格水準の變動、インフレーション現象の解明の展開が試みられているが、それは従来の貨幣ヴェール觀に立つ物價理論とは全く趣を異にしたものであり、博士のしばしば使用する表現によれば、「金」（かね）の經濟の根柢に「物」の經濟の存在を見ることによつて、兩者を不可分の一體として捉えることを基礎とするものであった。現實の經濟は、博士にあっては貨幣を捨象し、或は單なる媒介手段とするそれではないと同時に

山口博士の學問

に、貨幣現象もまた經濟の單なる貨幣的側面に關するものではなかつたからであり、そこには形式的にも内容的にも兩者が一體をなした「貨幣經濟」が一つの原理を以て貫かれた世界として描かれているが、その背景をなしたものが英、佛古典經濟學であることは既に述べた如くである。この書物の序文で博士は、本書で自分の果し得たものを、「社會人生の錯雜した裡に安定した秩序を見たい」といふ念頭を充たし得る自己満足だけであろう」と述べており、それは謙虚な心境告白の形ではあるが、同時に強い自信に満ちた學問觀の吐露と見るべきものであろう。『流通經濟の貨幣的機構』が出版されたとき三浦博士が博士に「上田（貞次郎博士）が喜んでいたよ」といふ表現で間接に「俺も認める」意味を表わされたことを故鬼頭教授から仄聞したのであったが、『價格水準の基本理論』の刊行された直後、筆者は三浦博士から直接に「山口は支那の天の思想に似た面白いことを考えている」といわれたことを記憶している。それは三浦先生の念頭では、山口博士が、支那思想を讚美したケネーの自然秩序觀と物價理論との結合を試みられたものとして映

っていたかと想像せられるが、それはともかく、三浦博士のこの言葉は、わたくしには、「あれは大變なことだぞ、よく考えて見ろ」といわれたように思われて、いまだに強い印象として残っている。最近「一橋アカデミズム」という言葉がしばしば反省的、批判的な意味で使われ、考えられているようである。もとより反省すべき点のあることは否定しえないが、しかしそれが反省せられ批判せられるために、そしてさらにそれを乗り越えるためには、その傳統がどのようにして培われて来たかへの理解が先ず行われなくてはならぬと思われる。上にひいた上田博士や三浦博士の言葉は第三者にとっては或は單なる挿話以上には響かぬものであろうが、尠くともわたくしにとっては、博士の學問を理解する上に、またいわゆる「一橋アカデミズム」を「文獻アカデミズム」として批評し去るためには、單なる挿話にとどまらぬものとして、書き落しえないものがあると思われる。

## 四

さきに博士の學問的態度の基本をなすものとして、理

論と歴史(事情)と政策の三者を一體をなすシステムとして理解する態度の重要視せられねばならぬことを指摘した。このことは博士自らの學問的態度であると同時に、博士が一定の經濟學に對し、それを理解する態度であり、さらに博士が英吉利古典經濟學と佛蘭西經濟學を、この意味でのシステムをもつものとして自らの學問の出発点として選ばれた理由でもあった。理論と歴史と政策を一體として理解するということは、博士自らのしばしば口にせられて来たところであるが、この三者は壓しつめて見れば歴史も政策も要するにそれぞれの理論の背景をなす事情であり、結局理論と歴史(事情)とが博士の學問を構成する二つの大きな支柱であるということが出来るであろう。勿論この二つの支柱——理論と歴史とが個々バラバラに併行したものではなく、この二つのものを結びつけるところに博士の學問の本領、眞髓があるといてよいであろう。そのために、理論が問題とせられるときには常に歴史が裏付けとして語られ、歴史が問題とせられる場合にも、實は歴史の理論的解釋という形をとっていることが見られる。著述の形をとった博士の業

蹟の比較的最初の部分では、理論が問題とせられるが、しかしこの時期においても歴史(事情)の研究、理解が裏付けとなっていた。このことは『流通經濟の貨幣的機構』や『價格水準の基本理論』に見ることが出来るし、さらに博士の最初の講義「景氣論」の央ばが恐慌史、景氣事情によって占められていたことにも見うけることはさきにも述べた如くである。博士の近年の業績はこれとは反對に歴史、事情に對する關心を示しているように見えるが、それはやはり歴史、事情の理論的解釋という形をとるものであった。この後者の特徴を最もよく代表するものとして「通貨金融政策の發展」(現代金融講座第三卷所載)が挙げられるであろう。それは最近における金融論上の著作としても、また博士の著作としても最も高く評價せらるべきものであり、告白すれば、これまで博士の理論面へのみ注視して來たわたくしは、博士のもつ新たな面に接した感を當時禁じえなかつたのであるが、考えて見れば、それは博士の學問的態度からする當然の一つの表われであった。最近における博士の關心は外國爲替理論、國際流通機構の問題に集中せられつつあるようである。

#### 山口博士の學問

ある。その代表的なものをわれわれは「國際金本位制管見」(一橋大學研究年報 商學研究I)に見ることが出来るが、それは理論と歴史(事情)と政策との結合の最も廣く、また生きた場がそこにあることを示すものといふのであらう。

ここで特につけ加えておきたいことは、博士が歴史的事實の丹念な研究者であることである。昭和十年、從來の調査部の組織が改められて經濟調査部が設けられ、主として明治初期の經濟事情の調査が始められたとき、博士はその主任者として調査の統轄に當られると同時に、自ら幕末、明治初期の通貨、金融事情に關する資料について事項別カード作製の仕事に従われたのであった。それは「法規分類大全」「明治貨政考要」その他當時の新聞紙、傳記等を一頁一頁を追ってカードにとるという方法であった。この作業を開始するに當って、博士は資料研究の方法について特に慎重を期し、部員とともにしばしば幸田成友博士に「大阪市史」編纂當時の經驗を聽かれ、さらに歴史資料の取扱方についてかねて兄事していられた上原專祿教授の助言を乞われる等、博士のこの仕事に

注がれた情熱は非常なものであった。このようにして博士自ら作製せられたカードは数千枚に及び、それが學問的財産として貴重なものであることは、そのことを知る限りの専門家の認めるところであるが、一般には殆んど知られるところのない博士の業績の極めて重要な一側面をなすものである。このカードは今もなお博士の座右におかれて常に利用せられつつあるものである。「日本金融史の一節——銀目相場・洋銀相場・爲替相場」(高垣寅次郎先生還曆記念論文集所載)、英文 *Interrelations between "Ginne" "Bar Silber, the Mexican Silber Dollar, and Foreign Exchange Rates during the Early Meiji Era.* (*Annals of the Hitotsubashi Academy, Vol. III. No. 2.*) は、この所産の代表的なものであり、退官せられた後の現在も、引續いてこのカード作製の事に従われつつあることは、博士の學問的態度と方向とを窺わしめるものである。しかしかういふときにも、博士は歴史的事實の單なる羅列には満足せられないで、

常に歴史の理論的解釋を目指されたのであった。

博士の學問については、なお語り論すべき多くのものがあるが、最後に今一つつけ加えておきたいことは、博士が學問を一生の仕事とせられ、そのために如何にすればいつまでもそれを續けうるかの方法を常に考えていられることである。ここでわたくしは一つの場面を想い起す。それは十數年前、根岸佶先生の還歴祝賀宴の催されたときのことであったが、どうすれば先生のようにいつまでも學問を續けてゆくことが出来るかと、その秘訣の教示を眞剣な面持ちで求められたことであった。偶々その席末をけがしていたわたくしは、根岸先生の老いて益益旺んな御精進の様子は承知していたが、そのときの博士の眞剣さと謙虚さとに心を打たれたことを未だに鮮やかに記憶している。退官せられた今なお、博士が學問への情熱を失われず、さらに新たな構想を以て研究を續けようとしていられるのは故なしとしないことを痛感するわけである。